

シンポジウム「発掘！沖縄の先史集落」の記録

玉榮 飛道・與那嶺 俊・長濱 健起・山崎真治

A record of the symposium on prehistoric settlements of Okinawa.

Takamichi TAMAE, Shun YONAMINE, Tatsuki NAGAHAMA, Shinji YAMASAKI

沖縄県立博物館・美術館，博物館紀要 第9号別刷

2016年3月30日

Reprinted from the

Bulletin of the Museum, Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, No.9

March, 2016

シンポジウム「発掘！沖縄の先史集落」の記録

玉榮 飛道¹⁾・與那嶺 俊²⁾・長濱 健起³⁾・山崎真治⁴⁾

A record of the symposium on prehistoric settlements of Okinawa.

Takamichi TAMAE¹⁾, Shun YONAMINE²⁾, Tatsuki NAGAHAMA³⁾, Shinji YAMASAKI⁴⁾

1はじめに

本稿は、沖縄県立博物館・美術館にて開催された
標題のシンポジウムの記録である。シンポジウムの開
催概要は、以下の通り。

沖縄県立博物館・美術館第 458 回博物館文化講座 シンポジウム「発掘！沖縄の先史集落」

主催：沖縄県立博物館・美術館

会場：沖縄県立博物館・美術館3階講堂

日時：平成 27 (2015) 年 7 月 11 日(土) 14 時～ 17 時
次第：

「伊江島ナガラ原第三貝塚の先史集落－縄文後
期(伊波・萩堂式期)の生活址－」

玉榮飛道(伊江村教育委員会)

「古宇利原B遺跡の先史集落」

與那嶺俊(今帰仁村教育委員会)

「喜友名東原ヌバタキ遺跡の発掘調査記録」

長濱健起(宜野湾市教育委員会)

「沖縄の先史集落を考える」

山崎真治(沖縄県立博物館・美術館)

討論(玉榮・與那嶺・長濱・山崎)

※なお、当日は台風 9 号接近のため、玉榮飛道氏は
参加できなかった。

本稿の構成は以下の通りである。

1はじめに

2発表資料(玉榮、與那嶺、長濱)

3討論の記録(與那嶺、長濱、山崎)

表 1 本シンポジウム関連年表

時代区分	土器型式	年代	ナガラ原 第三貝塚	古宇利原 B遺跡	喜友名東原 ヌバタキ遺跡
縄文 時代 後期	伊波式	3700 年前	●		
	萩堂式		●		
	大山式				
縄文 時代 晩期	室川式			●	
	宇座浜式	3200 年前		●	●
	仲原式	2500 年前			●

※表中の「●」は遺跡の主な時期を示しています。



図 1 本シンポジウム関連遺跡の位置

¹⁾ 伊江村教育委員会 Educational Board of I'E Village

²⁾ 今帰仁村教育委員会 Educational Board of Nakijin Village

³⁾ 宜野湾市教育委員会 Educational Board of Ginowan City

⁴⁾ 沖縄県立博物館・美術館 Okinawa Prefectural Museum & Art Museum

2 発表資料

伊江島ナガラ原第三貝塚の先史集落 - 縄文後期（伊波・荻堂式期）の生活址 玉榮飛道（伊江村教育委員会）

1. ナガラ原第三貝塚の位置

- ・伊江島の南岸、標高約 9 ～ 8m の海岸砂丘地に立地。
- ・遺跡の南側は海岸となり、リーフが広がる。
- ・周辺にはナガラ原西貝塚、ナガラ原東貝塚など、沖縄編年後期（貝塚時代後期）が主体の遺跡が所在。

2. 発掘調査の概要

- ・Ⅰ～Ⅶ層までの土層があり、うち 2 つの土層から遺構、遺物を確認。
- ・Ⅳ層：弥生並行期（貝塚時代後期）層。イモガイ集積遺構などが検出。
- ・Ⅵ層直上：埋葬遺構を 3 基検出。約 2,500 年前の遺構（人骨の ^{14}C 年代測定による）。
- ・Ⅵ層：縄文後期（貝塚時代前期）層。伊波式荻堂式が主体。

3. Ⅵ層から見つかった先史集落

- ・遺構、遺物とも、調査区の西側～中央にかけて分布が密となっており、東側になると分布が薄くなる。
- ・調査地は現在平坦だが、Ⅵ層～Ⅶ層では西から東にかけて傾斜しているのが見られた。
- ・竪穴住居址：2 基
- ・炉跡：17 基
- ・大型焼成遺構：1 基

3.1 竪穴住居址 1

- ・地山面を掘り下げて成形し、それを取り囲む石灰岩礫の石列が検出。
- 石組による壁が存在した可能性。
- ・平面形は方形。
- ・遺構底面にピットを 4 基確認（未調査箇所にピットが存在する可能性）。
- ・遺構床面に炉跡：壁面に焼けた跡が無いことから、屋内炉と推定。
- ・東西：約 120cm 南北：150cm 深さ：約 25cm（東西軸は更に広がる可能性有り）

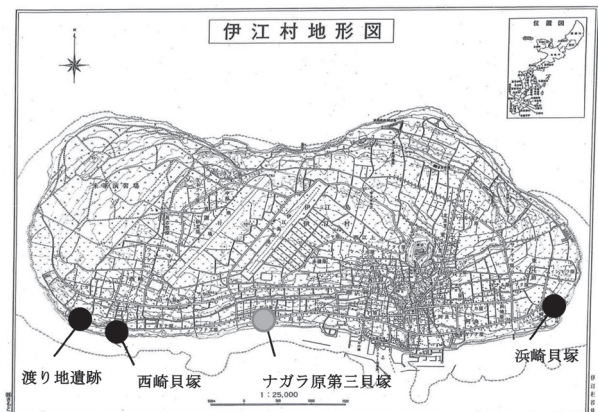


図 2 ナガラ原第三貝塚の位置



写真 1 竪穴住居址 1



写真 2 竪穴住居址 2

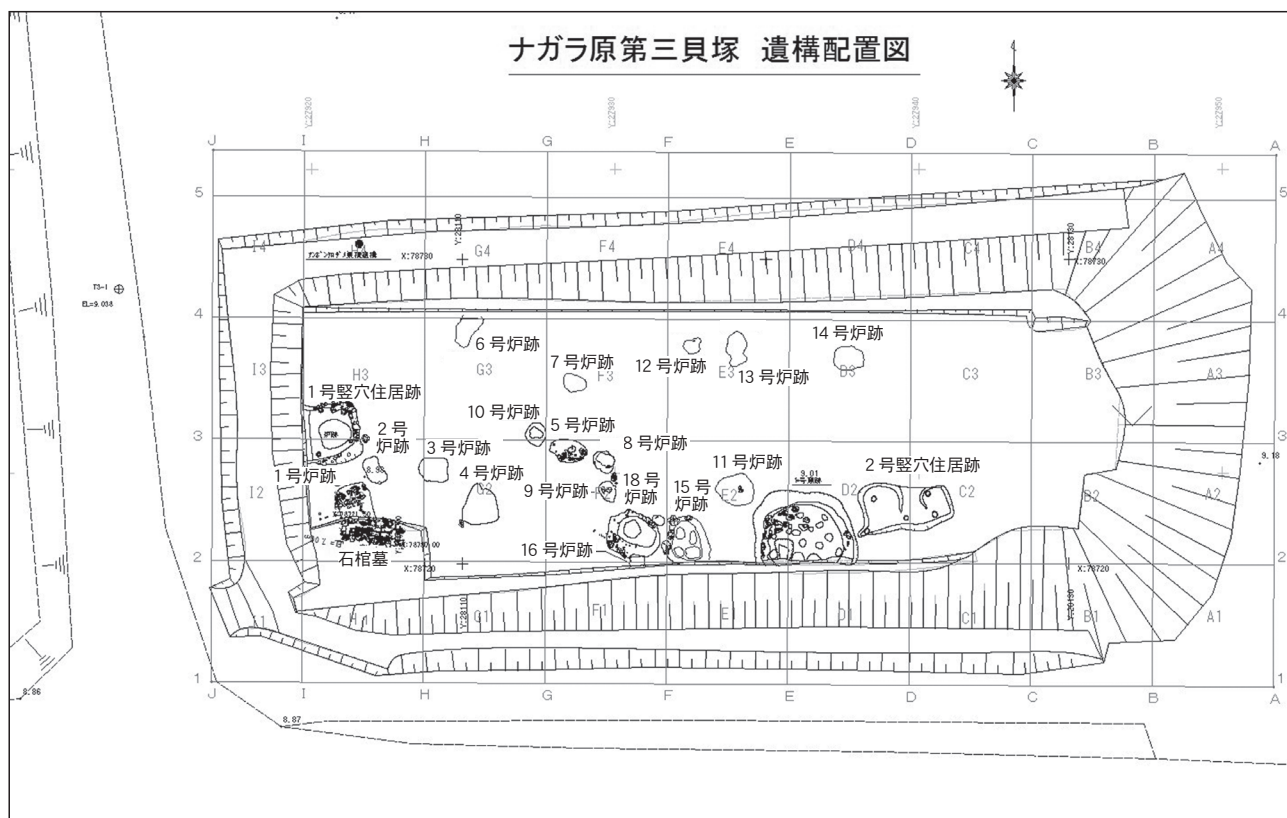


図3 遺構配置図

3.2 竪穴住居址2

- ・地山面を掘り下げて成形。竪穴住居址1とは異なり、石列は見られない。
- ・平面形は長方形。
- ・床面にピット5基、北壁中央にスロープ状の遺構(2基の住居址が重複している可能性有り)。
- ・長軸：約290cm 短軸：約150cm 深さ：約25cm

3.3 炉跡群

- ・炉跡は17基(地床炉：11基、礫敷炉：3基、石囲炉：2基、石組炉1基)(表1を参照)。
- ・炉跡4、5の遺構上面から、土器がブロックで出土。うち、炉跡4の土器の下部の土からは魚骨等が多く見られた(調理用または加工用の炉跡の可能性)。
- ・その他の炉跡の用途に関しては、調理用・加工用以外の用途の検討が必要。

3.4 大型焼成遺構

- ・竪穴住居址2に隣接して検出。地山面を掘り下げて構築される。

- ・平面形は円形。

- ・床面に石灰岩礫を配置。熱により石灰岩礫が溶けて再度固まる。
- ・焼土面も厚く、長期間使用された遺構と考えられる。
- ・遺構内出土遺物(土器片など)も多くなく、現在のところ、明確な用途は不明。
- ・直径：約300cm 深さ：約90cm

4. VI層出土遺物

土器、石器、貝製品、骨牙製品など多種多様な遺物が出土。

- ・土器：伊波式、萩堂式を主体に大山式、室川式、嘉徳I式、下部から面縄前庭式など。

伊波式、萩堂式は深鉢形が大多数。一部は炉跡上面から出土。



写真3 炉跡4 検出状況



写真4 VI層出土土器

表2 炉跡・大型焼成遺構一覧表

遺構名	法量	形状	炉 細 別	石灰化 の有無	サンゴ礫 の数の有無	灰層 の有無	遺構直上の 遺物の有無	遺物の有 無	地山面	備考
炉跡1	長軸:80cm 短軸:60cm		石組 炉	有	有					石棺墓直 下に続く 可能性有
炉跡2	直径:40cm	円形	地床 炉	無	無	有				
炉跡3	直径:90cm	円形	地床 炉	無	無	有			VI層(包 含層)	
炉跡4	長軸:150cm 短軸:120cm	横円 形	地床 炉	無	無	有	有(伊波式、 陸産貝、魚 骨、炭化物)		VI層(包 含層)	
炉跡5	長軸:120cm 短軸:70cm	横円 形	地床 炉	無	無	有	有(土器片)			
炉跡6	長軸:120cm 短軸:71cm	横円 形	地床 炉	無	無	有	有(土器片)		VI層(包 含層)	
炉跡7	直径:50cm	円形	地床 炉	無	無	有			VI層	
炉跡8	直径:70cm	円形	礎散 炉	有	有	有	礎			
炉跡9	長軸:90cm 短軸:60cm	円形	地床 炉	無	有	有			VI層(包 含層)	
炉跡10	直径:70cm	円形	礎散 炉	有	有	有				
炉跡11	直径:120cm	円形	地床 炉	無	無	無	礎			
炉跡12	直径:90cm	円形	地床 炉	無	無	無				
炉跡13	長軸:90cm 短軸:60cm	横円 形	地床 炉	無	無	無				
炉跡14	長軸:240cm 短軸:40cm	横円 形	地床 炉	無	無	無				
炉跡15	長軸:150cm 短軸:120cm	方形	石圍 炉?							床面に4 つの焼土 面。
炉跡16	長軸:55cm 短軸:50cm	方形	礎散 炉	有	有	有				
炉跡17	直径:140cm	円形	石圍 炉		有					炉跡15 の下部。
大型焼 成遺構	長軸:約3m 短軸:(約 2m)	円形	-	有	有	無(炭 層は 有)		有		全形の掘 削は行え ず。

・石器・石製品:磨製石斧、磨石、敲石、石皿、アッ
ズブレード、楔形石器、有溝石製品など。

・貝製品:貝皿、貝錘、サザエ製品、ホラ貝有孔製品、
ヤコウガイ有孔製品、貝珠、貝小玉、貝輪、獣型貝製品、
タケノコガイ製品など。

・骨牙製品:ヘラ状骨製品、尖頭状骨製品、垂飾品、
簪状製品、蝶形骨器。

・自然遺物:シャコガイなどの貝類、陸産貝、魚骨、
獣骨(イノシシ?)、石材(チャート片、チャート塊など)等。



写真5 VI層出土石器(石斧類)



写真6 サザエ製品出土状況



写真7 獣形貝製品



写真 8 骨製かんざし出土状況

5. ナガラ原第三貝塚Ⅵ層と同時代の遺跡

・現状、浜崎貝塚、西崎貝塚、渡り地遺跡の3遺跡。
 ・そのうち、西崎貝塚で竪穴住居址の一部、渡り地遺跡で竪穴住居址及び炉跡の一部が検出（岸本編1999：139、146）。

※但し、いずれも一部のための検出のため、遺構の全体像は不明。

6. 検討課題

・遺構と遺物との関連性：炉直上、炉跡内出土遺物（土

器、自然遺物等）以外の遺構（竪穴住居址、炉跡群）との関連性。

→いくつかの炉跡では、土器を用いた調理、加工などが行われていた可能性。

・定住性の可能性：現状不明。ただし、長期にわたって使用していた可能性がある。

・各遺構の年代観：伊波式・荻堂式の時期に納まると思われる。

今後、各遺構から採集した炭化物、貝類などから年代測定を予定。

・島内の同時代遺跡との関係：いずれも、砂丘地上に立地。

今後、出土遺物の比較など、検討が必要。

・他地域との交易：嘉徳Ⅰ式などの土器類、チャートなどから奄美、本島（本部半島?）との交易を行っていた可能性。石器石材に関しても、他の地域から得ていた可能性有り。

・祭祀の可能性：獣型貝製品2点、蝶形骨器は出土地点に近い

→祭祀を行っていた可能性?

古宇利原 B 遺跡の先史集落 與那嶺俊（今帰仁村教育委員会）

1. 古宇利原 B 遺跡の位置

古宇利島は今帰仁村の北東海上に浮かぶ島で、隆起珊瑚礁を基盤とした三段の海岸段丘が認められる。古宇利集落は島の南側に位置し、集落の中央部には古宇利原 A 遺跡が立地し、その東側約 400m 離れた集落の東端に古宇利原 B 遺跡が所在する。いずれも下位段丘の崖縁辺部に位置し、古宇利原 A 遺跡は縄文時代後期、古宇利原 B 遺跡は晩期に比定される。

2. 調査の概要

・平成 15 年、村道工事に伴う調査
 ・平成 25 年、個人住宅の建設、店舗の建設に伴う調査

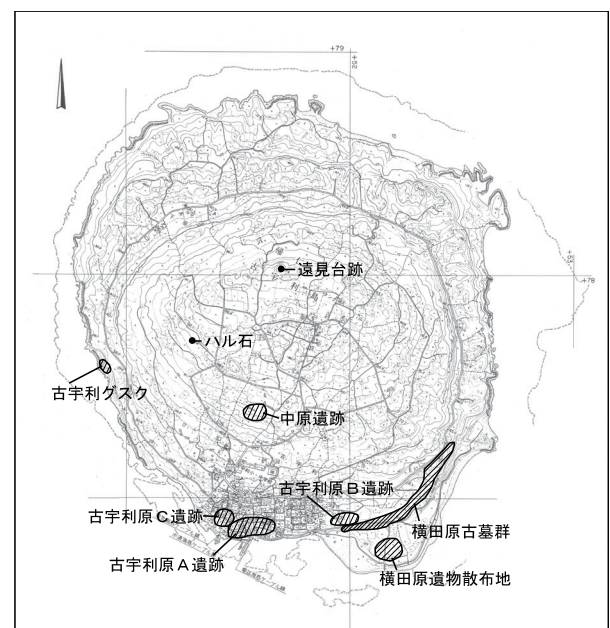


図 4 古宇利島の遺跡分布図

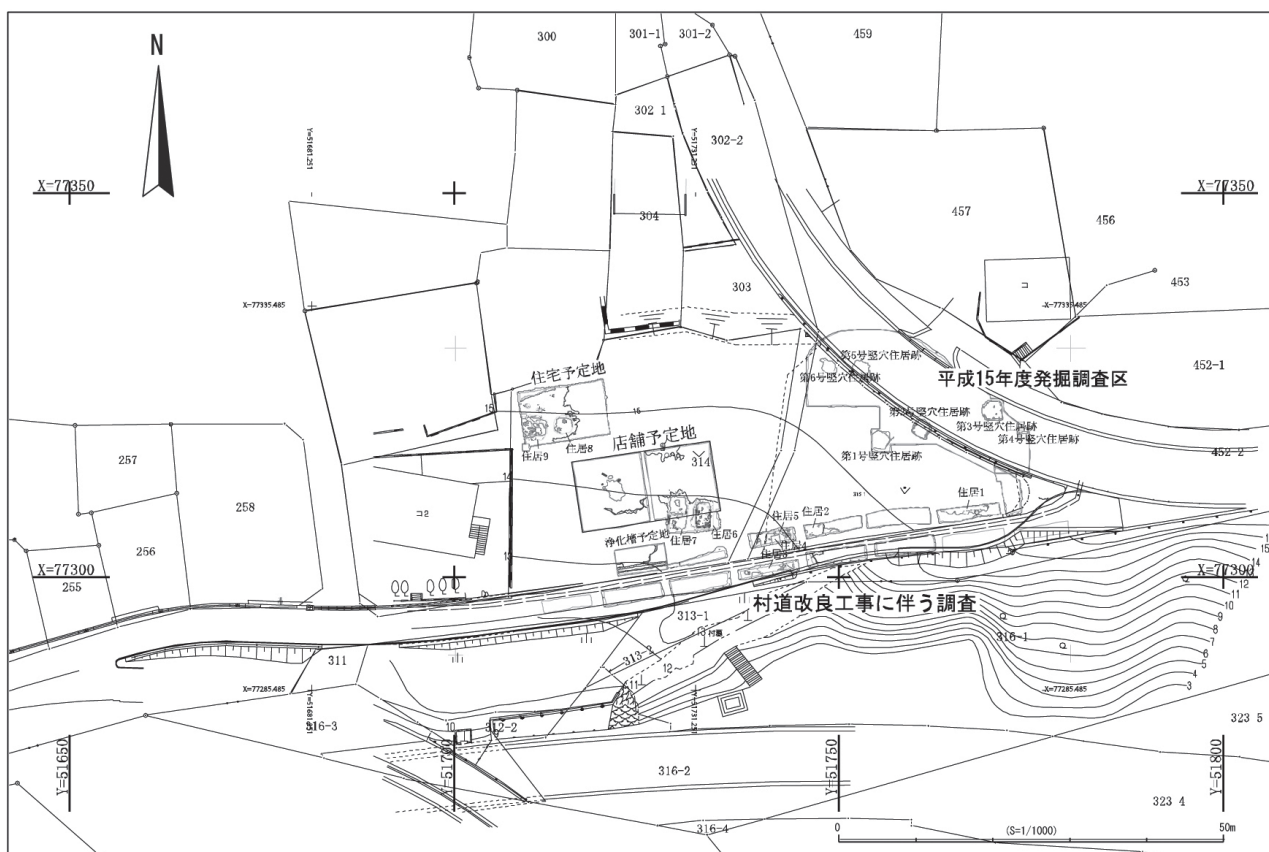
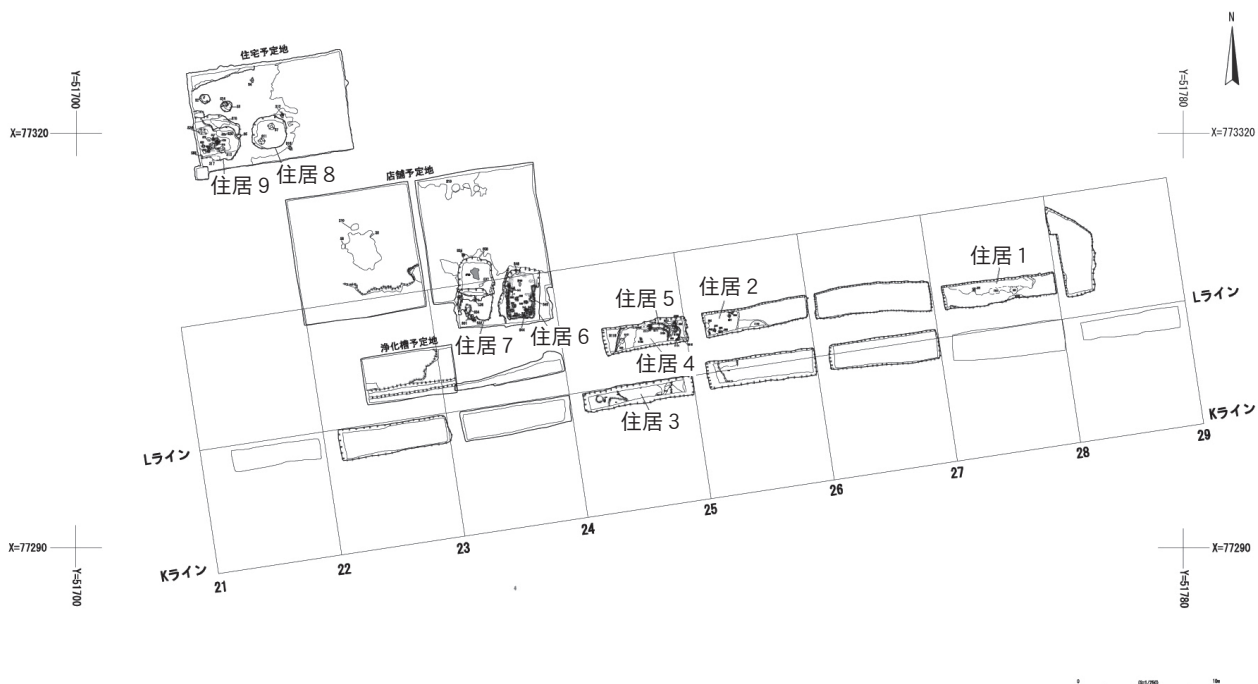


図5 調査区配置図



3. 検出された遺構

(1) これまでの調査で検出された遺構

- ・ 竪穴住居17基
- ・ 土坑2基
- ・ ピット97基
- ・ 炉跡9基

(2) 竪穴住居 6 (S20)

規模：4.3 m×3.6 m、深さ20 cm。

岩盤を掘り込み床面をフラットに仕上げている。掘り込みは北側が深く南側で浅くなり、地形に合わせたつくりになっている。竪穴内からはピットが複数検出されたほか、石材も検出された。琉球石灰岩のほか本部石灰岩、緑色岩などが見られた。大きさや形は一定でなく用途は不明。壁材に使用されたか？床面にはオレンジ色に変色した箇所があり、

炉跡と考えられる。竪穴内の縁辺部には岩盤を掘り込んだU字型の溝があった。

(3) 竪穴住居 7 (S21)

規模：4.3 m×2.3 m。深さ25 cm。

岩盤を掘り込み床面はフラットに仕上げる。掘り込みは北側で深く南側で浅い。竪穴内からは床面でオレンジ色に変色した炉跡が確認されたほか、複数のピットと溝が検出された。溝からは13点の石器がまとめて出土し注目される。竪穴住居7は遺物の量がとても多く、多量の石器、土器などが出土している。

(4) 竪穴住居 8 (S6)

規模：3.3 m×3.1 m以上。深さ20～30 cm。

地山面から検出された。遺構の上部は破壊されているが竪穴住居 9 と比べて規模が大きく、掘り込みも深い。一部が調査区外に延びているが長方形状になるとみられる。床面では、わずかではあるが、北側と南側に段がつけられている。床面の中央部にはピットが複数検出されるが、そのうちの3基は柱穴とみられる。遺構覆土からは炉跡の可能性のある焼土層が検出されている。

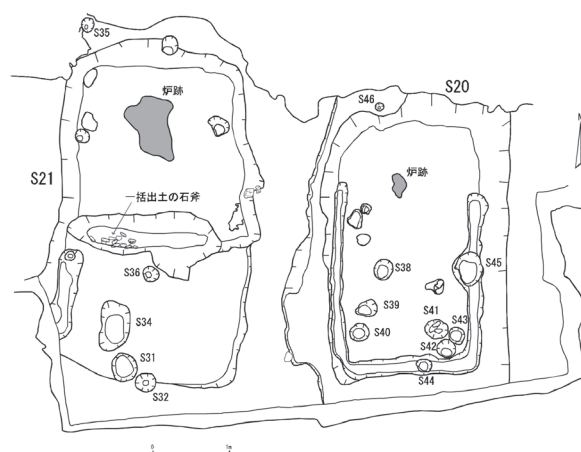


図7 竪穴住居 6・竪穴住居 7 平面図

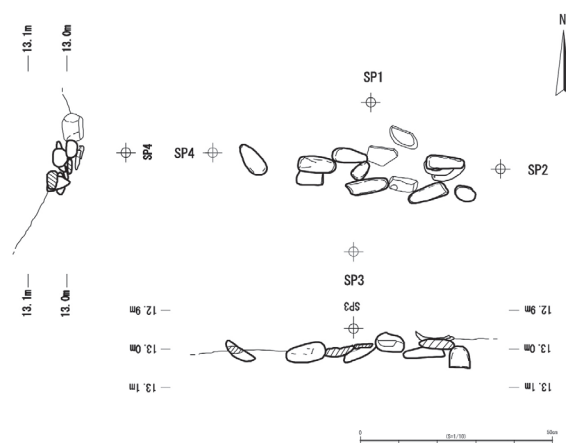


図8 竪穴住居 7 石斧一括出土状況

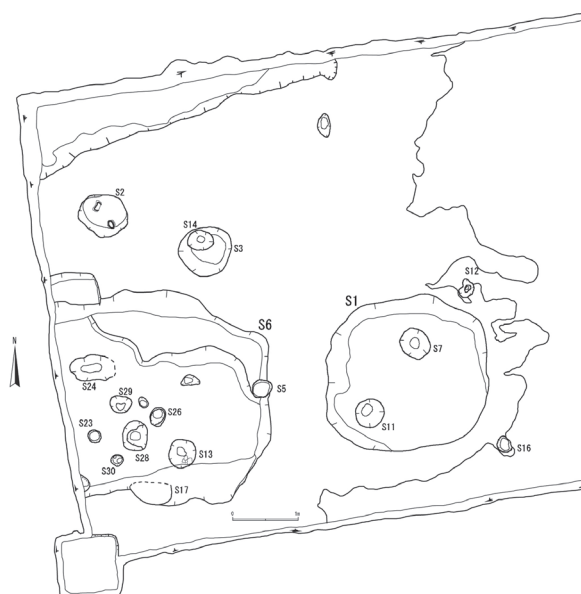


図9 竪穴住居 8・竪穴住居 9 平面図



写真 9 調査区全景（東から）



写真 10 竪穴住居 7・竪穴住居 8 完掘状況（南から）



写真 11 竪穴住居 6 石材検出状況（南から）



写真 12 竪穴住居 8 内の S23 土器底部検出状況



写真 13 竪穴住居 7 から一括出土した石斧（北から）



写真 14 イノシシ牙製装飾品

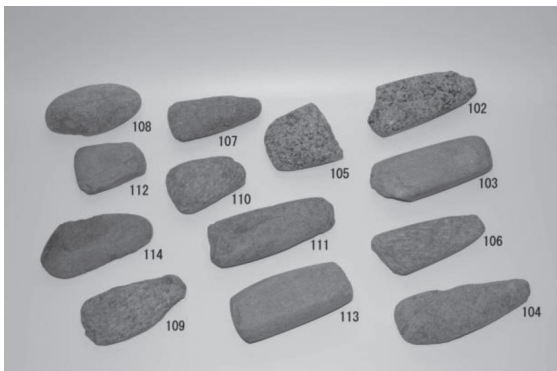


写真 15 一括出土石斧 集合写真

(5) 竪穴住居 9 (S1)

規模：2.5 m×2.4 m。深さ 14 cm

検出されたのは竪穴の床面と考えられる部分のみで、地山面を約 14cm 掘り込み、251cm×242cm を測り円形に近い方形状となる。床面からはピットが 2 基検出されているがその性格は不明である。遺構の規模としては平成 16 年の調査時に検出された竪穴住居の大きさとほぼ同程度である。遺物は土器片が少量出土している。遺構の大部分が耕作によって破壊されているため全容を窺い知ることはできないが、その形状から竪穴住居と想定した。

4. 出土した遺物

・土器：室川式土器、宇佐浜式土器に相当する土器が主体的に出土。その他、奄美系の喜念Ⅰ式や伊波・萩堂期の土器もわずかにみられる。

・石器：磨製石斧、磨石、敲石、石皿、砥石などが出土している。

・骨牙製品：骨針、装飾品などが出土。竪穴住居 7 ではまとめて出土した石器とともに、イノシシ牙製装飾品 2 点も出土している。

・自然遺物：獣魚骨、シャコガイ、サザエ、二枚貝

5. まとめ

竪穴住居から出土する遺物：竪穴住居 6 と竪穴住居 7 を比べると後者の方が遺物の出土量のはるかに多い。土器片（口縁部・底部）で約 2 倍、石器では約 3 倍になる。後者はほかの遺構に比べ、石器の出土量が突出して多い。

遺構の年代：ほとんどの遺構では室川式・宇佐浜式土器が主体的に出土する。しかし、竪穴住居 3・竪

穴住居 5・竪穴住居 6 では伊波・萩堂期の土器が主体的に出土している。

遺構の規格：1 辺が 2.3 m～4.3 m の大きさ。地盤の傾斜を利用し、南側を深く掘り込み、北側を浅く掘ることで床面を水平にする。入口の向きは？遺構内から出土する石材の用途は？



写真 16 竪穴住居 6・竪穴住居 7 完掘状況（南から撮影）



写真 17 竪穴住居 6・竪穴住居 7 完掘状況（北から撮影）

喜友名東原ヌバタキ遺跡の発掘調査記録

長濱 健起 (宜野湾市教育委員会)

1. はじめに

宜野湾市教育委員会は、平成 25 年 6 月から 9 月半ばにかけて喜友名東原ヌバタキ遺跡の緊急発掘調査を実施した。本遺跡は過年度にも発掘調査を行っており、平成 25 年度は第五次～第七次の調査となった。そのうち、第五次調査については竪穴住居跡・炉跡・土坑・ピットなどの各遺構に加え、様々な遺物なども見受けられた。今回は過年度の調査成果も含め、喜友名東原ヌバタキ遺跡の事例報告を行う。

2. 喜友名東原ヌバタキ遺跡とは

本遺跡は、昭和 56 年度に実施した「市内全域の遺跡分布調査」において初めて確認されているが、当時の表面踏査では 1～2cm 程度の土器小片しか確認できなかったため、「喜友名東原遺物散布地」とされた。その後、平成元年度に都市計画街路が本遺跡を通過する予定がなされたことから、それに伴った事前の範囲確認調査が昭和 63 年度になされた（第一次調査）。この調査において、縄文時代晩期相当期（約 2500 年前）の竪穴住居跡などが良好な状態で残存していたことが確認されたことから、当該地に当時の集落跡が存在することが判明した。このことから、街路工事に係る緊急発掘調査を平成元年に実施し（第二次調査）、16 基以上の竪穴住居跡をはじめ、屋外炉 3 基、土坑 2 基などの遺構を検出している。また、平成 5 年度には本遺跡の包蔵地内において民間開発が予定されたことから、緊急調査によって記録保存調査（第四次調査）が行われた。第四次調査においても竪穴住居跡が 5 基（うち 1 基は二次調査で確認された住居跡の一部）確認され、中でも大型住居跡 1 基も検出されるなど、当時の集落像をより詳しく知る情報が得られている。

3. 位置と環境

本遺跡は、宜野湾市喜友名東原に所在し、標高約 72m 前後の場所に形成された集落遺跡である。現在の遺跡から海岸までの直線距離は約 1500m を測るが、当時はもう少し近い距離だったものと想定される。遺跡地は、喜友名部落の東南側に連なる標高約 77m

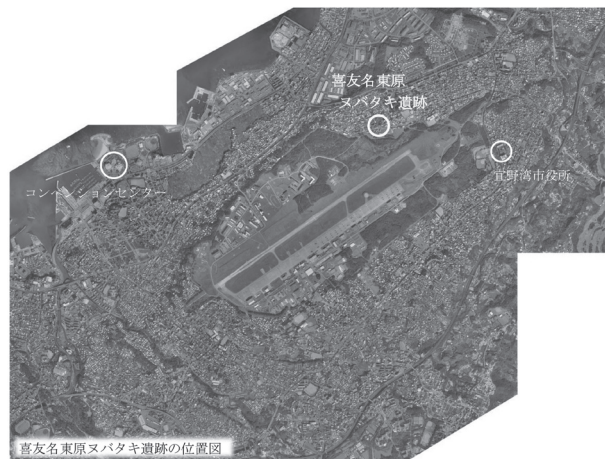


写真 18 喜友名東原ヌバタキ遺跡の位置図

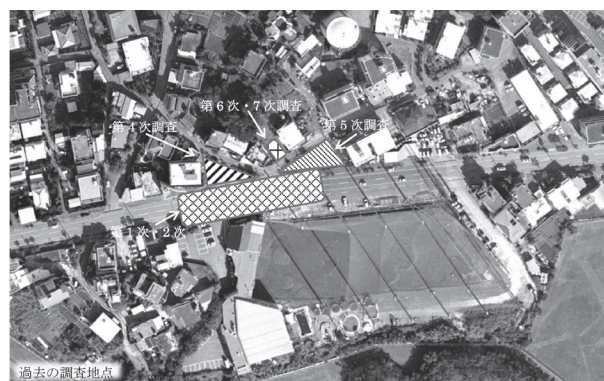


写真 19 過去の調査地点

の琉球石灰岩丘陵とその南側に相対する標高約 72m の微高地に挟まれた「ヌバタキ」と呼ばれる概ね平坦地に立地する。南側の微高地は「ヌバタキヌチヂ」と称されていたが戦後の採石によって大きく改変されており、遺跡地の本来の範囲を明確に示すことはできない状況である。しかし、戦前の旧地形図やその他資料などの検討により遺跡地の範囲は東西に約 150m、南北に約 100m の域内に収まるものと想定される。

なお、本遺跡の周辺には喜友名東原第四遺跡や上原濡原遺跡など、ほぼ同時期の遺跡が確認されている。

当時の生活面を掘る前の状況

黒い土の部分が遺構（昔の生活の痕跡）となります。
この段階では、まだ遺構の状況がはっきりとは分かっていません。
これから本格的に発掘調査のスタートです！

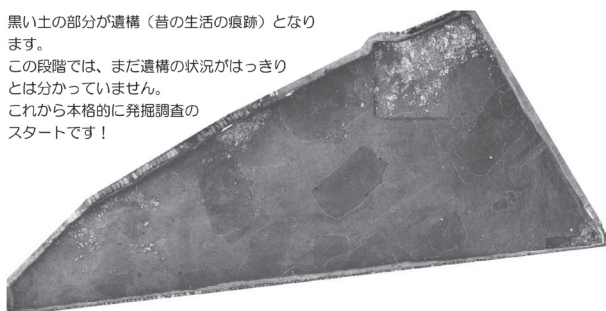


写真 20 当時の生活を面を掘る前の状況

当時の生活面を掘った後の状況

黒い土の部分掘っていくと、遺構の形が見えてきます。
ここまで発掘調査が進むと、遺構の状況が少しずつ分かってきます。
この段階までくると発掘現場での作業も終わりに近づいてきます。



写真 21 当時の生活面を掘った後の状況

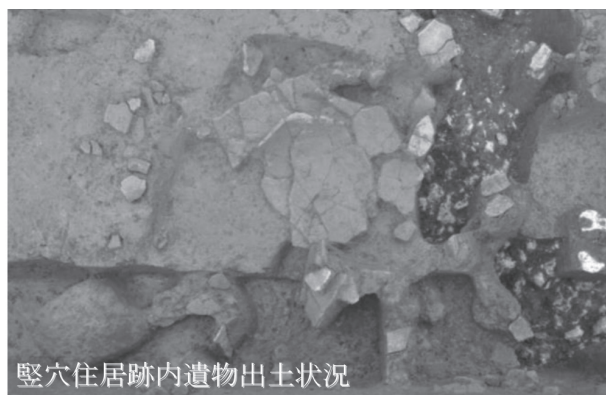


写真 22 竪穴住居跡内遺物出土状況

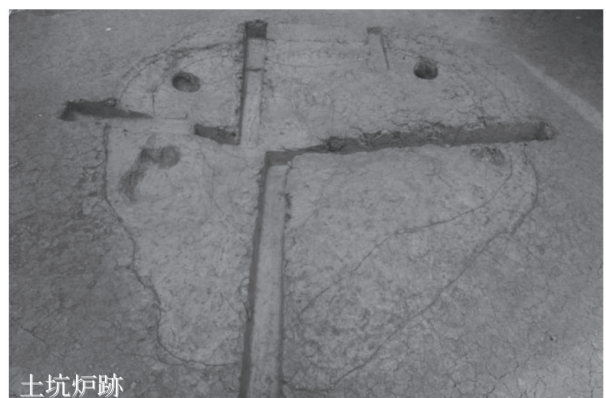


写真 23 土坑炉跡

4. 遺構と遺物

本遺跡で確認された主な遺構に竪穴住居跡、炉跡、土坑などの遺構があり、それらに伴う遺物も多く出土しているため、以下に紹介していく。

竪穴住居跡

竪穴住居跡には平面形態が方形状または隅丸方形状のもの、長方形状のものが確認されている。前者は概ね 2.5m 前後の規模となるが、後者の長方形状は約 3m × 5m ほどの規模で、大型の建物跡になると約 6m × 9m を測るものも認められている。住居跡の構造としては、穴を掘りくぼめて礫を敷き、粘土質の土を張るといった「張り床」をしており、その後も床面を 1～2 枚形成しながら断続的に同じ竪穴を住居として使用していた状況が窺われている。また、住居内の壁沿いには拳大の礫を配して壁土の芯材となす状況も見られた。その他にも、長方形状の住居跡内には幅が広めの段差を有するものも認められており、用途は判然としないが出入り口に伴うものの可能性も考えられている。なお、九州弥生時代の竪穴住居跡にも「ベッド状遺構」と称される類似の遺構が確認されているが、本遺跡は九州弥生時代よりも時期的に古いことから詳細については検討を重ねる必要があるものの、一部の研究者からは中国からの影響を示唆する意見もある。

また、住居として使用されなかった時期には屋外炉（廃屋炉）や廃棄土坑などに利用されていたと想定される状況も確認されている。なお、当該遺構に伴う遺物の大半は仲原式土器の範疇に含まれると思われる土器片、石器、獣骨、ニーズ（細粒砂岩）などが見受けられている。しかしながら、第二次調査時に確認された住居跡ではほぼ遺物が検出されておらず、隣接する調査区において異なる状況が確認されたことで検討を要する課題の一つである。

炉跡

炉跡は、第二次調査において屋外に 3 基、第四次調査では屋内に 1 基、第五次調査では屋外に 3 基以上が確認された。本遺跡では屋内炉跡がほぼ確認されておらず、屋外炉が主体をなす状況であったことが窺える。第五次調査で確認された屋外炉には、素掘りの土坑炉や土坑内に礫が認められるもの、竪穴

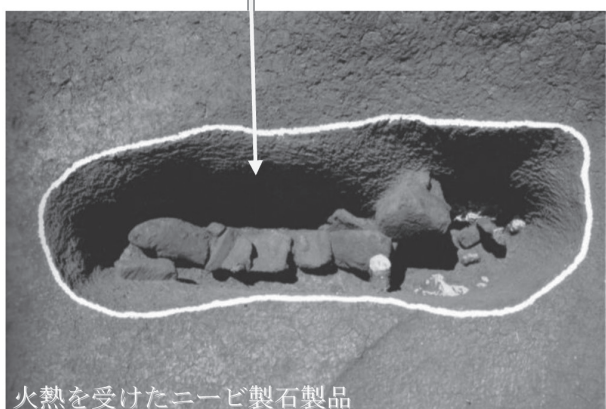


写真 24 火熱を受けたニービ製石製品の出土状況

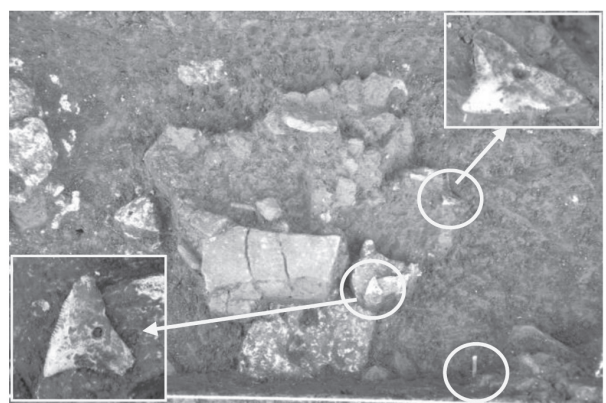
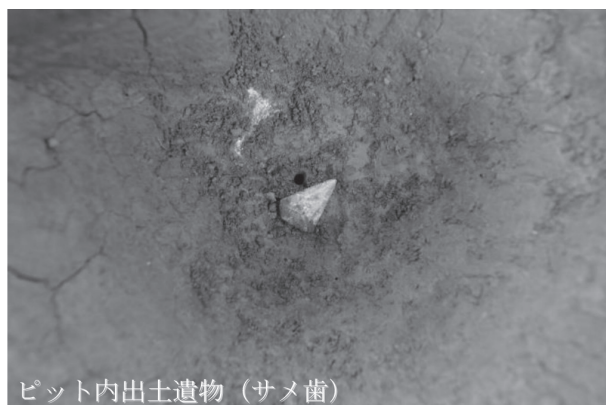
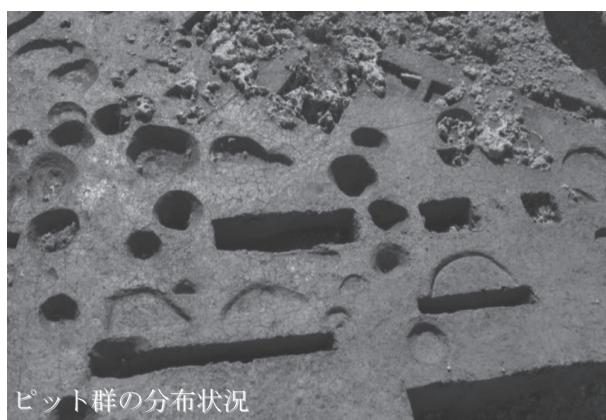


写真 25 サメ歯有孔製品出土状況 (○枠内)



ピット内出土遺物 (サメ歯)

写真 26 ピット内出土遺物 (サメ歯)



ピット群の分布状況

写真 27 ピット群の分布状況



遺構調査の状況

写真 28 遺構調査の状況

住居跡などを利用した廃屋炉と思われる炉が確認されるなど、炉によって用途の違いがあり得る可能性が考えられる。なお、うるま市の仲原遺跡、高嶺遺跡、シメグ堂遺跡などでは石囲いの屋内炉跡が多く認められており、本遺跡とは様相が異なっている。

土坑

本遺跡で検出された土坑は、第二次調査で2基、第五次調査でも複数基が見受けられた。第五次調査で見られた土坑には、現在検討中で未だ用途が不明なものもあるが、土器片やサメ歯有孔製品がある程度まとまって出土する土坑などが確認されている。ま

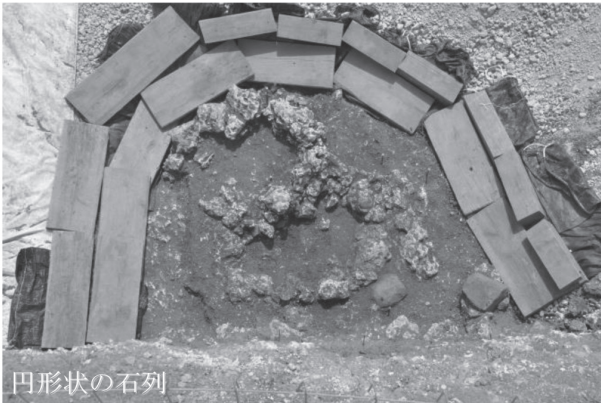


写真 29 円形状の石列

ピット群

ピット群の中には、竪穴住居跡に伴うと思われるピットもいくつか確認されているが、住居跡に付随するピット以外にも柱痕を有するピットが第五次調査で確認された。当該遺構については、プランなどが想定できず柱だけが立っていた可能性も考えられるとして、今後も検討を要する課題の一つである。なお、一部のピットからは未加工のサメ歯が底面などより検出されている。

大型建物遺構（仮称）

第五次調査区北側で検出された本遺構では、サメ歯有孔製品がまとまって出土した土坑などが形成されている。遺構内は岩盤を平坦に削り、礫を円形状に配した石列を少なくとも2回形成した状況が確認されている。この円形状の石列には新旧関係が認められ、前段階の石列を一部崩して新たに円形状の石列を構築する状況が窺われた。石列の内部にはシャコガイなどの貝類や土器片、ニービと思われる遺物などが出土している。遺構の周辺には前述のサメ歯有孔製品のほか壺形土器、石器、土器片集中状況が認められているものの、遺構の性格などについては検討を要する

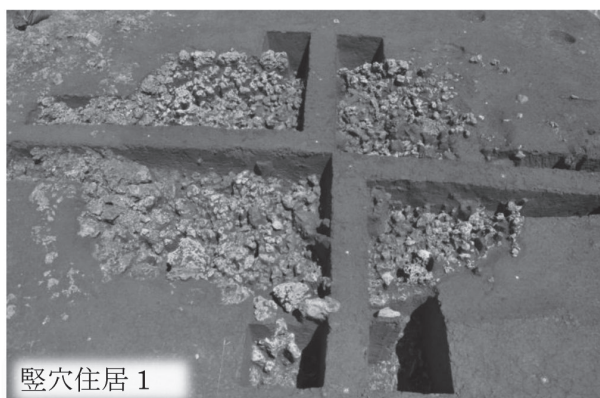
ものである。

5. まとめ

- ・喜友名東原ヌバタキ遺跡は、南北の丘陵に挟まれた平坦な場所に立地する縄文晩期相当の集落遺跡である。
- ・竪穴住居の構造は礫敷きの後に「張り床」を施し、壁面に沿って礫を配す。また、住居内に幅広の段差を設ける遺構も見受けられる。
- ・炉跡は屋外炉が主体をなし、中には廃屋炉と思われる遺構も確認されている。
- ・柱痕を伴うピットが複数基確認されている。
- ・大型建物遺構に附随する遺構や遺物にバリエーションが認められる。
- ・特徴的な遺物として、複数のサメ歯有孔製品、加工されていないサメ歯、ニービ製の石製品、壺形土器などが出土している。

6. おわりに

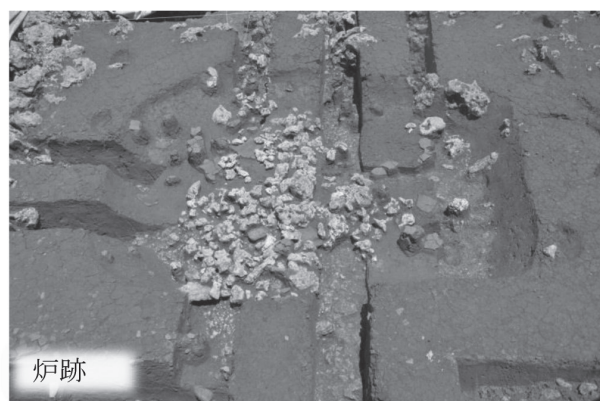
今回は、喜友名東原ヌバタキ遺跡について最新情報も含めて報告を行った。本遺跡は縄文時代晩期ごろの集落遺跡として、宜野湾市内のみならず沖縄県内においても重要な遺跡である。これまでの調査において確認された同時期の集落遺跡である仲原遺跡・高嶺遺跡・シヌグ堂遺跡（うるま市）、ナガラ原第三貝塚（伊江村）、古宇利原B遺跡（今帰仁村）などと比較検討を行うことで、当時の生活様式や集落構造などが垣間見えてくるものと考えられる。逆に、本遺跡から得られた情報をもとに他地域の類例遺跡を改めて検証することも必要であり、各地の集落遺跡において当時の社会的状況をより復元できるよう、今以上に活発な意見交換を行っていくことが求められている。



竪穴住居 1



竪穴住居 2



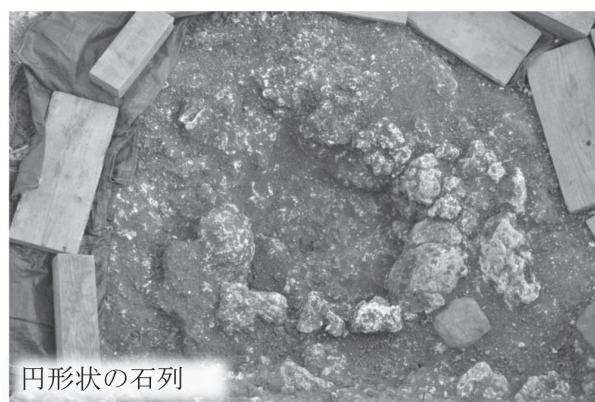
炉跡



土坑 5



大型建物跡 下面の状況



円形状の石列



ピット



発掘現場の風景

写真 30 遺跡の調査状況

3 討論の記録

(山崎) それでは討論に入りたいと思います。まず、いくつか質問がきていますので、それについてお答えする形で進めていきたいと思います。

会場からの質問への回答

今回の発表で、「ピット」という言葉がいくつも出てきましたけれど、「ピット」とは何ですか?という質問がきています。これは柱を建てる為に地面を掘り窪めた穴のことです。だいたい柱の太さが10cm、20 cm くらいの大きさになりますと、実際に柱を立てるために掘る穴は直径20 cmとか30 cm程度のものになります。例えば、もっと大きい直径50 cmとか60 cm程度の大きさになってきますと、今度はピットとは呼ばずに「土坑」という風と呼んで区別をしています。今回の発表のピットというのは、柱を建てるための穴だと考えていただければ良いかと思います。

海獣類やジュゴンなどの骨が見つかったことがありますか?という質問ですけれど、先ほど與那嶺さんの発表でジュゴンの話が出てきたと思うので補足をいただければと思います。

(與那嶺) 古宇利原 B 遺跡の調査で平成 25 年・26 年度の調査で、ジュゴンの肋骨と思われる骨が出ております。それ以前の平成 15 年の調査でも骨が出てきて、何かしら製品が作られていたと思うのですけれど、出土しているということですね。

(山崎) ヌバタキの方ではいかがでしょうか?

(長濱) ヌバタキでは、ジュゴンというのは特に目立っているものは確認されていません(註1)。サメの歯や脊椎などが確認されておりまして、それ以外の海獣類というのはヌバタキの方では特には確認されていません。

(山崎) ありがとうございます。続きまして、竪穴住居の屋内にある炉跡。地炉(地床炉)に該当するようなものは発掘で出てきていますでしょうか?要するに住居の中に炉があるかどうかということですが、與那嶺さんの方から。

(與那嶺) 古宇利原では炉跡を9基発見していますが、そのうちの8つが住居の中から確認されております。

(山崎) 住居と同時に利用されていたか確認することは難しい?

(與那嶺) 恐らく同時期。ヌバタキで出たような廃屋炉という状況ではなく、規模もこじんまりとした炉跡なので大丈夫だと考えております。

(山崎) ヌバタキの方はいかがですか?

(長濱) ヌバタキの方も、まず屋内にある炉の形の話で言いますと、決してゼロであるというわけではなく、一部の住居跡に関しては屋内炉としてもこじんまりとしたのは確認されています。

平成 25 年度の調査では、逆に、住居跡の中から屋内炉として明確なものは確認されていないということをお話させていただきました。地炉(地床炉)に関しては、建物の外、屋外の方で掘り込まれた炉とは別に、地面が焼けた様な状態のものも一部では確認されています。

(山崎) ありがとうございます。続きまして、古宇利原遺跡に住んでいた先史人は、水の入手場所はどこにあったのでしょうか?ということですが、水との関わりはいかがでしょう?

(與那嶺) 大変難しい質問だと思うのですが、古宇利原 B 遺跡で定住していたのかなと考えた時に、まず考えるのが水だと思うんですよ。古宇利島は、戦後に水道が引かれるまでは、天水を主に利用していたようです。今、井戸もあることはあるのですが、2か所井戸がありまして、日照りが続くと海水が出るとい様な井戸だったり、当然先史時代からある井戸でもなくて、近世以降の井戸ではあるんですけど。それを考えるとやはり水には不便していたのだろうと考えています。他のところから持ってきたかというのはわからないです。天水もしくは対岸の島、沖縄本島に行ったのかなということですね。

(山崎) 湧水は近くには?

(與那嶺) 湧水が多分ほとんどないと思いますね。

(山崎) 続きまして、ヌバタキの方にいきたいと思えます。大型住居の役割について、集落内のリーダーの家なのか、それとも作業場なのか?ということですがいかがでしょうか?

(長濱) 大型住居ということですが、過去に調査した第2次調査でしたかね、先ほどもスライドの方で写真を出したのですが、大型住居跡、ニービ(細粒砂岩)の石製品が出ている住居跡ですね、それに関して調査をしてはいるのですが、まだこれが正解であろうという明確な答えが出ていなくて検討中と

いう風になっています。

ただですね、一部赤土を掘り込んだような大型住居とされているものに関しては、もしかしたら、リーダーとか何かしらの特別な人の関わる遺構という可能性もあるかと思うのですけれども。また別で、さきほど紹介したのですけれども、平成 25 年度に出た大型建物遺構、そちらに関しては、住居跡に比べて掘り込まれていることは確認されておらず、岩盤を成形して遺構を形成している状況がありますので、そういったところはもしかしたら住居ではなくて、別の意味、何らかの作業場というような意味合いを恐らく含んでいるのかなと、今は考えています。

(山崎) 結局、いろんなバリエーションはあるけれども、今のところ何か特別な人の家なのか、作業場なのかとか、特定できる要素は今のところわからないという感じ？

(長濱) そうですね、大型住居だからといって、そこに特別な遺物があったりというのは、特に認識としてはありませんので。今後、慎重に検討させていただければと考えています。

(山崎) ありがとうございました。それと関わることになるかもしれませんが、ヌバタキ遺跡で見つかったベッド状遺構（堅穴住居の掘り込みの中に、一段高く作られたテラス状の施設）があったかと思いますが、その遺構の性格について教えてくださいというご質問ですけれども。

(長濱) 資料の方にはベッド状遺構という言葉を入れたのですが、このベッド状遺構というものは、過去の調査でも出ていますし、今回の調査でも確認できています。ベッド状というのは、恐らくベッドとして使ったものではなくて、住居の中に少しベッドの様に幅広い段差を設けたものです。この構築物なんですけれども、あまり県内でも事例がなく、今、事例探しをしている最中です。

実際に九州の弥生時代でこのような感じでベッド状遺構というのが出ていますと話は聞いていますが、九州の弥生時代ということはヌバタキよりも後の時代ということになりますので、それと直接関係するかという疑問が出るという状況です。また、一部の研究者の中では、このベッド状遺構が中国大陸の文化的影響を受けた可能性もあるんじゃないかという説もあるのですけれども、実際にどういったものかというのが

まだ明確には分かっていません。また別の意見として建物の出入り口に伴うものではないかという意見もありますし、建物の中で、道具とか物を置いた棚的なものではないかというような意見もあります。まだ、明確に何であるというのが言えないというのが現状です。

(山崎) ありがとうございます。先ほど、古宇利原 B 遺跡でも堅穴住居 8 で、段状の付随した遺構があるということでしたけれども、こちらの方はどのように考えておられますか？

(與那嶺) 調査中の時も何だろうと考えたんですけど、宜野湾の方でベッド状遺構という例もあるよと聞きながら、どういう性格のものなのかちょっとわからないですね。明確に段差がしっかりあるわけではなくて、なだらかに外と床面との間にあるような形なので、ちょっとはつきりはわからないですね。

(山崎) 図面を見るとそんなに幅が広いわけでもないようなので、何か出入りする為の施設とかその様な可能性も考えられるのですかね。ありがとうございます。

続きまして当日資料（本稿 24 頁下左）のヌバタキ遺跡の炉跡の説明のところで、ヌバタキ遺跡の炉跡とうるま市の仲原遺跡や高嶺遺跡と、これも堅穴住居と炉跡がたくさん見つかった遺跡ですけれども、炉跡の様相が違っているということが書かれていますけれども、その違いがどういうことなのかというご質問ですが、いかがでしょうか？

(長濱) 炉跡についてですね、実際にうるま市の仲原遺跡だとか、高嶺遺跡、シヌグ堂遺跡という、ほぼ同じ時期の集落遺跡があるんですけど、そちらを調査した方に話を伺う機会がありまして。まずヌバタキ遺跡に関してはですね、結構、屋外炉がいくつかあって、面積的にも大きな屋外炉がいくつか確認されています。

それに対して屋内炉というのは、今回の調査においては明確なのは確認されなかったというのは先ほど話したのですけれども、それに対して、うるま市の仲原遺跡だとか高嶺遺跡、シヌグ堂遺跡というのは屋内ですね、建物の中に石囲いの屋内炉があると、それがほとんどである、という様な話も聞いています。炉跡をちゃんと石で囲んで、それなりにしっかりとした炉を作ったという様な話を聞いていますので、それと比較するとヌバタキ遺跡の炉跡というのは、そういった意味で若干違いがあるということですね。実際のその

違いがどういったものに起因するのか少し話もさせてもらいましたけれど、場合によっては地域差というものがあったり、あるいは時期差があったんじゃないかというように思います。

(山崎) ありがとうございます。廃屋炉(住居を使い終わった後に住居の上屋を取り払った窪みで火を焚いたもの)はあるけれども、その住居の中に生活用の炉といますか、暖を取る為のそういう様な施設は基本的にはヌバタキ遺跡では確認できていないという…?

(長濱) 基本的に確認できていないというわけではなくて、一部では屋内炉と認定できるものも確認はされているんですけれども、綺麗に石で囲われたようなものはないので、若干差異があるということですね。

(山崎) 石囲いのタイプはないということですね。ありがとうございます。埋まらないと残らないという発言がありましたが、なぜ埋まっているのか?という質問が非常にするどい質問だなと思ったんですけど。

考古学の発掘というのは基本的に埋まったものを見つけるわけですね、埋まってないものは地上に出て動いてしまっただけ残らないということになるわけなんですけれど。何で埋まるかというのは結構難しい問題でして、堅穴住居は地面を掘り込んで作った施設ですけれど、掘り込んだ時に当然掘るわけですから、土が出るわけですね。その土をどこに持って行ったかというのと、よく言われるのは堅穴住居を掘った時の土というのは上屋を葺いた時に上屋の周りに周堤と言ったりもしますが、要するに土を盛り上げて堅穴住居の中に雨水が入ってこないように囲いをつくるということが行われていたんじゃないかとよくいわれます。

実際発掘すると、なかなかそういう堅穴住居の周りに積み上げた土盛を見つけるのはほとんど不可能なんですけれども、あったんじゃないかと言われています。恐らくあったとしますと、堅穴住居を取り払った時に当然周りに積み上げた土は次第に中の方に崩れ込んでいって、そして埋まるということが考えられる。ひとつはそのような考え方があるかと思います。

ただ、具体的に遺跡がどういう風に埋まっていくのかというのをきちんと確認された事例も恐らく多くはないと思いますので、この辺りも具体的にどうして埋まっているかということについては、それぞれの事例をみながらきちんと検討していく必要があるのかなと思います。ちょっと玉虫色の回答で申し訳ないですけど。

最後にですね、堅穴住居は北方系の住居だという話をしたのですけれども、この堅穴住居が北の方から来た人たちがつくった住居なのでしょうか?というお話・質問があがってきます。

先ほど、私は確かに堅穴住居は北の方のものじゃないかと話をしましたが、いろんないわれ方がされるんですが、堅穴住居という施設は日本列島では北海道までみられます。さらに北の方の沿海州ですね、そういうところの狩猟採集民なんかも堅穴住居を作っていたといわれていまして。北の方では非常に深い、深さが2mもあるような住居を掘っています。要するに冬場非常に寒いので、シェルターの様にしてその中で暮らしていると。そういう事例が知られています。

一方、南の方にいくと堅穴住居があるかといいますと、南の方には基本的にはないわけですし、先ほど話しました蘭嶼(台湾)の事例ですね。あれが地面を掘り込んだ施設ということで堅穴住居と関連づけて考えられることもあるんですけども、基本的には南の方にいくと、平地式の住居、高床式の、要するに熱いので涼しく過ごせるような住居を作っているということになるわけです。

問題は北の方から来た人たちが作ったのかということなんですけれど、堅穴住居というのは沖縄の方ではだいたい一番古い堅穴住居は4000年前位の市来式土器という鹿児島の方から沖縄に影響を与えた土器がありますけれど、その市来式土器とはほぼ同じ位の、面縄前庭式などの時代から沖縄では堅穴住居というものが見つかるようになります。それより古い例えば5000年前とか7000年前とかそういう時代にも遺跡はあるのですけれども、堅穴住居という様なきちんとした施設はまだ見つかっていませんので、基本的には市来式土器と同じ時代以降に沖縄では堅穴住居というものは出てきています。

そういう点から、一番考えやすいのは市来式土器をですね、沖縄からも市来式土器は見つかるわけなんですけども、運んできた人たちが堅穴住居という文化を沖縄に伝えたんじゃないかと、ひとつは考えられるわけです。実際沖縄で出てくる住居は、今日お話のあった古宇利原もそうですけども、伊波式、荻堂式、室川式など、いわゆる沖縄的な土器を使う人々が住んだ住居という風に考えられていますので、九州からこちらに移住してきた人が作ったものではなくて、恐らくそ

ういう情報を仕入れた地元の人たちが作っていた施設ということになるのかなと考えております。

すべての質問を取り上げることはできませんので、以上で質問への回答ということにさせていただきたいと思います。

続きまして、具体的な討論の方に入っていきたいと思います。

遺跡の年代

最初に確認しておきたいのは各遺跡の時代ですね、考古学の世界では時代がいつなのかということをいつも細かい議論の中でしているといわれてしまうんですけど。

表1の方にですね、このシンポジウムの関連年表をつけております。先ほどもお話をしましたように、今回のテーマはですね、主に縄文時代の後期といいますか、市来式土器相当の時代以降の話ということになっているのですが、そこにナガラ原第三貝塚とか、古宇利原 B 遺跡、喜友名東原ヌバタキ遺跡の主な時期を入れています。

だいたい主な遺跡の時期は入れてあるんですけども、古宇利原 B 遺跡でもヌバタキ遺跡でも竪穴住居跡や炉跡などの遺構が出てきていて、そういう遺構の中心的な時期がだいたいいつ頃になるかということをし少し補足していただけたらと思います。與那嶺さんからお願いします。

(與那嶺) 遺跡の時期ということなんですけども、室川式から宇佐浜式にかけての時期に遺物が集中しているということになります。

(山崎) 住居とか遺構の時期も？

(與那嶺) そうですね。遺物包含層や遺構なりの遺物の様相はほとんど一緒なんですけど、同じように室川式から宇佐浜式そのあたりに比定される土器がほとんどです。

(山崎) ありがとうございます。ヌバタキの方はいかがでしょうか？

(長濱) ヌバタキの方ですけど、資料の方にあります宇佐浜式、仲原式というのに黒丸がついていますが、まず仲原式という土器がですね、結構長い間使われている土器というのがありましてですね、明確にいつまで何年前というのはなかなか言えないんですけど、一部ですね、ヌバタキ遺跡を実際調査し

ていくと、弥生時代の九州の土器も一部でてきたりはしますので、こちらの資料の方でだいたい 2500 年前風に書いてありますけれど、まずそこぐらいまでは恐らくいくかなという考えています。

実際に炉跡だとか建物に関してなんですけれど、調査していくと、まず僕らがよくやるのは土器を見てから、おおまかな時代・時期の把握を恐らくするんですけど、この宇佐浜式、あるいは仲原式に含まれる時代をふまえるというのを認識はしていますので、基本的には 2500 年から 3000 年、3200 年前位というイメージを僕は持っています。

(山崎) ありがとうございます。今日はちょっと詳しい報告はなかったですけど、ナガラ原第三貝塚の方は伊波式から荻堂式ということで、それぞれ少しずつ遺跡の年代が違ってきていると。恐らく、年代の違いが遺跡の状況にも少しずつ違いをもたらしているのではないかと考えておりますけれども。注意していただきたいのは、土器で我々考古学をやっている人間は、土器ですぐ話をしてしまっ、大山式なら大体あのぐらいの時代かなというのがわかるんですけど、最近、実際その土器の時代が何年前なのかということを調べる科学的な手法も結構発達してきてまして、この土器の時代が何年前なのかということが、おおよそわかるようになってきています。

例えば、表 1 に少し年代値を入れていますけれども、伊波式土器は古い年代だと 3700 年前位までいく年代値が出ていますし、宇佐浜式土器ですと古いものですと 3200 年前、仲原だと新しいもので 2500 年前ということで、こういう風に年代値が少しずつわかってきているわけです。これを見て思うのが、例えばこの縄文後期（貝塚時代前 IV 期）という時代は伊波式、荻堂式、大山式、室川式とか 4 つ土器があるわけですけど、これを合わせてだいたい 500 年ぐらいの時代幅の枠ですね。ということは、ひとつの土器の時代がだいたい 100 年とかそこらということになってくるわけです。

ところが、その下の縄文時代晩期と宇佐浜式、仲原式という 2 つ土器がありますけども、こういう区別しかされていないんですけど、実際その年代幅をみますと、2 型式でですね、700 年位ありますよね。700 年位ありますので、それぞれの土器で単純に 350 年ずつくらいあるということになりますので、何々式と

いってもですね、その土器の時代が何というか同じ時代幅を表しているわけではなくて、ある程度、時期によって時代幅が違ってきているということが注意しないといけない点になってくるかと思います。

ですので、たくさん堅穴住居が出ていても、例えば一時期にそこにたくさん人が住んでいたのか、それとも長い間、少しずつ人が住んでいたのかによって、その集落の考え方が変わってくるわけですね。そういうことを考えるうえで、少しですねこういう土器の時代幅といいますか、そういうことを少し考えていかないといけないところは注意していただきたいと思います。

集落の立地条件

それでは、続きまして、今回ですね、それぞれ遺跡の内容についてご発表いただいたのですけれども、恐らくいろんな方が一番興味あるのは、なんでその場所に集落がつくられたのかということが一番興味のあるテーマじゃないかと思います。

我々考古学者は、どういうところに遺跡があるのかということを野外を歩きながら探したりします。なぜその場所に遺跡が遺されたのか、居住に関する良い条件が何かあるのかというのが問題になるわけですが、例えば、ナガラ原第三貝塚は伊江島の南海岸、前面にリーフがひろがるような環境にありまして、そういう意味では非常に住みやすい環境にある遺跡じゃないかという気がします。

古宇利原B遺跡もですね、南向きの緩斜面ということですので北風を避けられるような立地になる遺跡になるかなと思います。何かこういう古宇利原とかヌバタキ遺跡は、その場所に遺跡が遺された何か良い条件があったのかということについてお考えをお聞かせいただければと思いますけれども、與那嶺さんの方から。
(與那嶺) 古宇利原B遺跡ですけども、現在の古宇利島の集落は島の南側にありまして、山崎さんがおっしゃったように北風を遮るようなところに立地しているわけですが、当時から島の南側ということで、後ろ側に斜面があって、北風が当たらず、南側は海に面しているので、現在の豊かな漁場ということになっていますので、海で獲物を捕りつつ、北風をしのげる場所ということで選ばれた場所なんじゃないかなと考えています。

(山崎) 僕らが単純に住むのに適した場所ということ

を考えると、沖縄だと、水があるところというのを一番考えてしまうのですが、先ほど古宇利島の方は水があまりないという話でしたよね。どういう風にしてそういう苦勞を克服したのか、水がないことを承知で、それでも住むのに適した条件があったということなのかその辺はいかがでしょうか？

(與那嶺) ここが本当に難しくて、水がないのにここまで集落が発達できるんだなと。検討を要することだと思うんですけど、目立った湧水も近くにはないですし、天水を利用したような施設も発掘で出たというわけではなくて、この水に関してはまさに謎であります。

(山崎) 意外と現在の我々が考えるほどには、水に重きを置いていなかったということかもしれませんね。ヌバタキ遺跡の方はいかがでしょうか？

(長濱) ヌバタキ遺跡は、遺跡の北側に標高 77m 級の琉球石灰岩の丘陵、山があるということ。あと、遺跡の反対側南側にも標高 72 m の高台があったと。丘陵に囲まれた場所にヌバタキ遺跡が形成されている。與那嶺さんもおっしゃっていましたが、季節的な風を避けるということを意識した可能性はあるのかなという風に思っています。

あとは、水の問題ですけど、ヌバタキ遺跡の近くに目立った川というのが今のところぱっと思い浮かばなくて、基地の中に行くと洞窟や洞窟の天井が崩れた場所とかが、一応比較的近い位置にあったりはします。そこを地下水が流れているという状況もあるにはあるのですけれど。また別のヌバタキ遺跡^{うえはらぬりばる}からだいたい 400 m 位離れた場所にですね、上原濡原遺跡という同時期の遺跡があるんですけど、この濡原という地名ですね、当て字になると思うんですけど、漢字で書くと濡れた原、雨で濡れた原と書くんです。

意味合いとして合っているどうかかわからないんですけど、実際に地形としてみていくと、大雨とか降った時に、その周りの水が一気に集まる水はけの悪い場所があるんですね、そういった水溜りになりやすい場所があったり、洞窟が崩れたあとの地下水がとれそうな場所が近くにあったりとかを考えると、標高 70m という高いところで水をとる場合、そういったところから水をとっていたという可能性も考えられたりはするのかなという風に今は考えています。

(山崎) そうしたお話だと、先ほどの古宇利原B遺跡

と同じように、水を中心にした遺跡の選び方ということではない、ということになるのでしょうか？

(長濱) そうですね、当然水も大事な問題だと思うんですけど、それに伴っての風避けというの、また必要な条件になってくるのかなと考えています。

生業をめぐる

(山崎) ありがとうございます。もうひとつですね、生活条件のお話をしたいんですけども、この遺跡が残っているということになりますと、そこで当然生活をするわけですね。生活をするとなると当然いろんなものを取ってきて、当時はまだ農耕をやってない狩猟採集の生活で、魚を捕ったり、木の実をとったりそういう風にして生活をしていかなければいけないような時代だったと思いますけれども、今回ご発表いただいたような遺跡における主な生業ですね。遺跡から見つかった遺物、動物の骨とかですね、そういうのも見ついているんじゃないかと思しますので、そういうものを踏まえて、それぞれの遺跡でどういう生業が行われていたのかということについてお話いただきたいと思います。

(與那嶺) 古宇利原B遺跡の場合ですと、出土する自然遺物の方からみても、海からのものが結構多くて、魚の骨であったり、貝殻、そういうものが大量に出ます。それに混じってイノシシの骨も出ることは出ます。遺跡の前面が豊かな海ですので、その海から獲った魚だったり、貝を食べていたんだろうという風に簡単に想像はできるわけですけども。

実際、発掘調査をしていると細かい魚の骨なんかもでてきはするんですけども細かすぎて取り上げるのが難しかったり、貝殻も二枚貝の小さな貝殻だったりするので、劣化してぼろぼろになっていて、何という貝だったかとかは、そこまでは把握できてないんですけども、場所によっては大量に出土したりしています。

(山崎) 魚とか貝とか獲って食べるっていうのは想像できる暮らしではあると思うんですけど、例えば魚をさばいてあるとかですね、魚を焼いたとかですね、炉跡の周りで魚の骨がたくさん出てきたとかそういった事例はありますか。

(與那嶺) 気のつくようなところでは、ちょっと見ないですけども、屋内の炉跡が出た近辺で、確かに魚骨などが多く出ているような印象は受けましたね。

(山崎) ヌバタキ遺跡はいかがでしょうか？

(長濱) ヌバタキ遺跡の方ですけど、まず調査しているとですね、さきほども魚、サメの話をしましたけれど、それ以外にも他の魚の骨も出ていたりしています。イノシシの骨も出てますし、実際に木の実ですね、イタジイとかドングリみたいなもの、そういった植物遺体も出ています。

実際に炉跡に伴っているものというの、ヌバタキの方はちょっと印象としては弱いんですけど、主に堅穴住居だとか、先ほどの大型建物に伴ってイノシシの骨、魚の骨が出てます。住居跡を实际掘っていると、土の中に魚の骨が細かく密に入っている土が一部あって、土を削っていると、魚の細かい骨でジャリジャリという感触がある位、密に入っているということもあるんですね。实际これが、こういった意味合いとしてそういう状況になったのかというのはまだ考えている最中でありまして、事例の一つとして、そういうものがあつたということです。

(山崎) ありがとうございます。ヌバタキ遺跡は結構標高が高くて、海からもそれなりに離れている場所なんですけども、そういう場所でもそれだけ魚を獲ってきて利用しているというお話だったかと思います。

もうひとつ気になるのですがね、沖縄の考古学をやっているとですね、沖縄で魚を獲るにはイノー(礁池:ラグーン)の中で簡単に魚が獲れますので、そういうところのものを獲っていればいいじゃないかと、あまり外まで出ていく必要がないんじゃないかという話をいつもするんですけども。サメなんかはですね、あんまりリーフの中には入ってこない生き物ですので、当然そういうものを獲ろうとするとですね、外海まで行かないといけなわけですね。今回ヌバタキ遺跡では、サメの歯とか椎骨がまとまって出てきたということで、非常に注目される事例になるかと思うんですけども、サメの利用について、サメを獲っていたと思いますか？

(長濱) そこですね、僕らもすごく悩んでいます。实际にヌバタキというか当時の人ですね、ヌバタキ遺跡から海岸まで、今現在はいたい1500m位、直線距離であるんですけど、当然今は埋め立てとかをしていますので、当時はもっと海が近い状況だったと思います。

実際に当時の方が海に行つて魚を獲っていたりした

かということなんですけど、まず当時の人が1日当たりどれくらい移動をして、1km 先は当時の人からするには遠いのか近いのかというような疑問もあるとは思いますが、この人たちがどこまでを移動距離として、獲物を獲っていたりとかしたのかということも考えないといけないかなと思ってます。

ただですね、実際にこの標高 72m に住んでいた人たちが、海まで行って、危険を冒してサメを捕まえてくるということをしたかということ、僕個人的には、まだ自信を持ってそうですねと言えないですけど。ただ、実際にサメの歯とか魚類というのは出ていますので、何かしらの方法で獲っていたということは確実。この辺は、ほかにご存知の方がいたら教えて欲しいという感じです。

(山崎) サメなんかですと、死体が打ち上げられるという風なことも考えられはすると思うんですけど、それにしてもヌバタキ遺跡の場合、結構サメの歯が出ていて、しかも椎骨もまとまって出ているというお話です。打ち上げられたものを利用するというよりは、割と積極的に獲っていたということを考えた方がいいのかな、と個人的には思いますけども、今後の整理作業の方にも期待したいという風に考えております。

竪穴住居とその規模

次に具体的な個別の遺構をですね、竪穴住居とか炉跡とかいろんなものが見つかるわけですが、そういうものの内容について話を進めていきたいと思います。

今回竪穴住居という住居の話をしました。我々は竪穴住居という風に呼んでいますので、これが本当に住居なのかということをおまわり疑問にも思わないわけですが、沖縄の住居はですね、他の本土の方の住居に比べると非常に小さい。小さいものでは 2m 強くらいしか大きさがなくて、人ひとりが横になるのがやっとというような形態のものがたくさんあるんですけども、こういうものを本当に住居と考えていいのかどうかということをおまわりもう 1 回考えてみたいと思います。

それと同時に、さきほどのヌバタキ遺跡の大型施設の話もありました、ただの住居でなく明らかに他の住居と違って大型の建物が、この時期には出てきたりします。そういうものについても、集落の中での位置

づけというのはどういう風に考えられるかということについてご意見をうかがいたと思います、長濱さんの方から先に。

(長濱) 住居の問題ですね、実際にヌバタキ遺跡を発掘していると、大型の住居跡もいくつか出ていて、比較的大型住居に比べて小型の住居跡としているものも約 20 基くらいは出ていると報告させていただきました。まず、過去の調査をしたものから話を聞いたことがあるんですけど、大型住居跡に実際に、例えば特別な人が住んでいたかっていう話になる時にですね、やはり明確にそういった痕跡が見当たらないってことです。

ただ、こういった先史時代集落の研究している方の話を聞いていると、大型住居というか大型の施設 1 基に対して、一般の普通の住居跡、小さな住居跡が 6 軒、7 軒くらいでひとつの集落を構築しているんじゃないかという意見もありますので、何かしら大型建物の性格があったはずだとは思っています。それが、実際にリーダーの家なのかあるいは何かしらの作業をした場所なのか。また、別のところで、今でいうと公民館みたいなちょっと集合して会議をする場所なのかという、いろんな考え方があるんですけど。

実際にどういった役割に落ちていたってところまではまだいってなくてですね、これも引き続き、他の地域の事例とか検討していきながら、考えていければと考えています。

(山崎) 大きさ 2m って「マイホーム」として大丈夫そうですね？

(長濱) あの当方で 2m…。それについても疑問というか、一部わからないところがあるんですけど、山崎さんがおっしゃった通り、すごく狭い、今で考えると狭いという認識にとられるんですけど、実際に本当に人が 2・3 人寝たら窮屈じゃないかというような印象はどうしても受けます。ただ、当時の一集落にどれくらいの人が入ったかということも考えなくてはいけないと思うんですけど、やはりこういった遺物だとか遺構というのを含めて考えると、今のところは住居として考えても差し支えないのかなという風に思っています。

(山崎) ありがとうございます。與那嶺さんお願いします。

(與那嶺) 2m いかない、2.3m とかそういう規模のものが結構出ていたりするんですけども、規模は小さい

んですけども、実は岩盤を掘り窪めて作っているということ、床面はまた平らにならしているということ、岩盤を削って平らにしているということ、掘り窪めた堅穴の中に溝を掘ったりして、結構な労力を費やしていると思うんですよ。確かに小さいんですけども、住居とする為に、そこまでの労力を費やしていたんじゃないかということもひとつは頭に入れても良いのかなと思います。

それ以上の大きさになってくると、そんなに人数も入れはしないんですけども、住居という風に考えて差し支えないのかなと考えています。

(山崎) ありがとうございます。住居として、皆さん住んでも大丈夫ということでしたので、住居ということにして話を進めていきたいと思いますが、この堅穴住居と言っている遺構の中にも、実はいろんな形態のものがあります。当然サイズの違いもありますし、今日ちょっとお話をしたのは、住居の際に石を並べて積み上げて作っている形態の住居もあります。

堅穴住居の上屋構造

私の方でも少しお話をしましたように、一番気になるのは、この住居の上屋ですね、実際その上に屋根をどういう風に葺いたかということが一番気になる点ではあるんですけども、そこが一番考古学的には残らない部分ということになりますので、これもいろんな想像を交えながら考えていかないといけないんですけども。今回それぞれ、古宇利原遺跡とヌバタキ遺跡の方でも住居跡、かなりまとまった数の住居が見つかっていますけども、そういう住居の上屋の形態についてですねご意見を伺いたいと思います。

今までこの沖縄の住居の上屋の復元形態では大きく2つの系統がありまして、今日私の方でお話しました、住居の周りに石を積み上げてですね、その上に屋根を葺こうという、壁を作って屋根を葺くというそういうタイプの復元(例：うるま市仲原遺跡の復元住居)がひとつあります(壁支持型の復元案)。

もうひとつは柱を立てて、その柱の上に屋根をのせるといふもの(支柱支持型の復元案)。そういう2タイプの復元案があるわけですけども、今回ご報告いただいた古宇利原B遺跡とヌバタキの方では、どういう形態の上屋が考えられるのかということについてご意見を伺えればと思いますが、與那嶺さん。

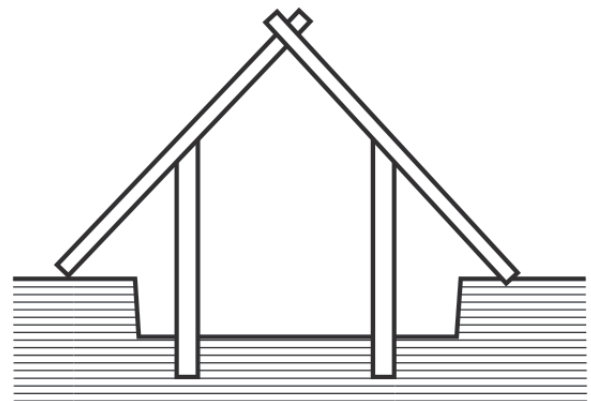
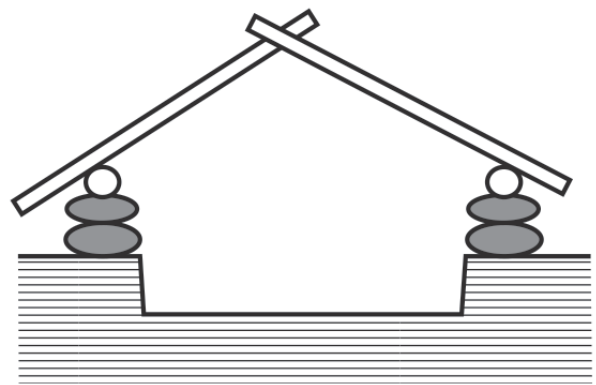


図10 堅穴住居の復元案(上:壁支持型、下:支柱支持型)

(與那嶺) 2通りの案をおっしゃっていただいたんですけども、古宇利原B遺跡でも、2つの案が考えられるのかなと。というのは、住居跡の中に石が、石材がたっぷり詰まっているものもありますし、堅穴の中に柱の跡があったりしていますので、石を周りに積んで屋根をのせたり、それを支える為に地面に穴を掘って柱を立てたり、どちらも考えられるのかなという気はします。ただ、確かに残らないものなので、決定的なことは言えないんですけども。柱穴も結構見つかっているということで、支える構造があったんだという風には考えています。

(山崎) ありがとうございます。ヌバタキ遺跡の方はいかがでしょう。

(長濱) ヌバタキ遺跡の方もですね、住居跡の壁側にですね、石を並べるっていう状況が確認されています。あと、恐らく住居跡に伴うと思われる、柱穴ですね、ピットですね、あるにはあるんですけども。ただ、実際に

どういった上屋があったっていうのはそこまで追求はできていないですけど、写真30の1番上の2枚ですね。堅穴住居1、堅穴住居2の2パターンの住居跡の写真を載せています。堅穴住居1に関しては見てわかるかと思うんですけど、堅穴の中に沢山石が入っている状況になります。逆に、堅穴住居2に関してはですね、比較的石がなくて、壁側に並んで石があるというものなんですけど、こういった感じでごく近接して見つかった堅穴住居でもこういった違いがありました。

なぜこうした違いがあるのかというのは、難しいんですけど。それを、上屋の問題で考えると、一部では堅穴住居2みたいに石囲いが壁側にあってですね、その内側に深めの柱穴ですね、ピットがあると。もう1個外側、堅穴の外にも浅めのピットがあるという状況も実際に確認はされていますので、必ずしも全部が全部そうではないと思うんですけど、ヌバキ遺跡の事例でいえば、柱穴を内外に設置して上屋を作ったというような住居も恐らくあったんじゃないかと思います。

逆に堅穴住居1みたいに石がすごく入っているんですけど、これが実際に1基の住居でこれだけの石が使われたのかという疑問もあるんですけど、恐らく石積みのなものもあった可能性があるのかなという風に認識としては持っています。

(山崎) ありがとうございます。私の方から支柱を持つタイプ(支柱支持型)と、壁を積み上げてその上に屋根を置くタイプ(壁支持型)という2つのタイプを提案をさせていただいたんですが、どうも2人のお話では、両方とも想定できるのではないかというようなお話だったんじゃないかと思います。

やっここまできて、屋根を葺くというところまでたどり着いたんですけども、沖縄は、昨日もそうでしたが、台風が非常に多い地域ですね。台風が来ますと、本当に簡素な堅穴住居の屋根なんかはすぐ吹き飛ばしてしまうんじゃないかと心配してしまうんですけども。

仲原遺跡の復元住居

実は沖縄では、先ほどご紹介しましたうるま市伊計島の仲原遺跡というところで、うるま市教育委員会の方で復元された堅穴住居が研究されております。実際にこの堅穴住居が、そういう沖縄の風土にどれくらい

対応できるのかということについて、今日うるま市教育委員会の横尾昌樹さんが来ていますので、コメントをいただければと思いますが、仲原遺跡の宣伝も兼ねて、一言お願いします。

(横尾) どうも皆さんこんにちは。うるま市教育委員会文化課の横尾といいます。山崎さんの発表でご紹介があった伊計島に仲原遺跡という先史時代の集落跡が復元された遺跡があります。現在、おおよそ5軒だったと思うんですけど、堅穴住居が復元されています。

台風の時はどんな感じかというと、いつもハラハラしています。いつ壊れるのかと。3年前か4年前位なんですけど、大型の台風が来た時に、一部は屋根が崩れ落ちてしまって、壊れた状態で1年そのままにしていた時もあります。それを、近年再度修復して、今綺麗な状態になっているんですが。台風が来るとちょっと予想がつかないです。場合によっては壊れてしまう時もあります。台風が来て壊れなかったとしても、何もしないとおおよそ5年位で、だんだん屋根が朽ちてきてですね、形状が変わってきて、正面から見ると、右側が傾いていたりしてきます。

この遺跡の整備は平成5年くらいに完成して、今の状態になったのですが、当時は地域の人たちがですね、常に、ちょっと形が変わってきたら、カヤを葺いてですね、修復をしていただいたのですが、だんだんそういうこともなくなってきてしまっていて、平成20年位に新しく綺麗したんですが、その時に修復した大型の堅穴住居が、現在若干屋根が崩れてきてしまっています。ということを考えると、何もしないとおおよそ5年位でだんだん屋根の形が崩れてくるということですね。屋根の形が崩れてくると、下部構造の柱であるとかそういったところにも影響してきて、縄でしめているものなので、雨の影響であるとか、そういったことからだんだん徐々に崩れてくるというような状況です。

台風が来た時はですね、飛ばされないかというような不安があるんですが、一応ネットを掛けて、カヤは飛ばないようにしてあるのと、あと復元する際に色々検討しています。屋根をそのままにしておくとポーッと飛んで行ってしまうので、屋根を、骨組みに対してですね、地中に柱を打ってですね、それに縛りつけて、屋根を吹き飛ばされないような形での構造はとっております。ただそれは、現代の方法でただとったというわ

けではなくて、一応その発掘の際に見つかった柱穴ということ意識して、そういった柱穴が屋根を飛ばさない為の構造として働いていたんじゃないかということを考えて復元したと聞いております。そんな感じです。**(山崎)** ありがとうございます。仲原遺跡の事例は、人が住んでない住居ということで、手入れも人が住んでいる家程は多分やっていないということになると思うんですけども、そういう状態ですとだいたい5年位の耐用年数だというお話でありました。

竪穴住居の耐用年数

もうあまり時間がなくなっているんですけど、今回それぞれ発表いただいた遺跡ですね、住居を掘ってみて、住居の耐用年数ってなかなか難しいと思うんですけども、古宇利原の事例なんかだと、建て替えをしている例もありますよね。同じ場所でこう何回か造りかえているような事例もありました。そういう事例をちょっと考慮していただいて、そういう住居ですね、ひとつの掘った場所、そこで住居を維持できるのは、だいたいどれくらいの時間幅が考えられるのか、想像で構いませんので、お話いただければと思います。

(與那嶺) 今日の発表の中に入れてないんですけど、村道工事のところの発掘調査区ですね、住居跡が切り合って検出されているところがありました。調査しながら切り合いに気づいたら、もうほとんど掘った後、ある建物を掘りきったと思ったら、床面からもう1棟分が出てきたということで、遺物としては綺麗に分け切れてはいるんですけども、ひとつ新しい方、切っている方の遺構から出ているものが、さきほどもあったような室川式から宇佐浜式を中心とした遺物が出ています。

もうひとつ切られている方、古い方の建物がですね、本当にはっきり分けられているのかという自信はないんですけども、古めの伊波式や萩堂式の土器が混ざっている状況がありました。この土器の年代がまさにそうあたるのかということに、まだ直結はしないとは思ってはいるんですけども、そういう可能性もなくはないのかなと。と言っても、時期的には何百年もあるわけですけども、それがそのままあったかどうかは置いておいて、そういう建て替えがあって、土器の時期差もいくつもあったりする、非常に難しいですけど。

(山崎) 古宇利原B遺跡では、同じ場所で何回も何回も建て替えている事例が目立つような気がひとつはするということと、そういうのを踏まえますと、例えば、台風で屋根が飛ばされても、また造り直して、頑張っで同じ場所で大事に大事にこう繰り返して使うということをやっていたのかなということを考える次第ですけれども。では、ヌバタキ遺跡の方は？

(長濱) ヌバタキ遺跡の方ではですね、古宇利原B遺跡みたいに綺麗に切り合ったというのが、僕が知らないだけだと思いますがちょっと認識がなくてですね。ただ、平成25年度の話で言えば、長方形の竪穴住居跡があったんですけど、その下からさらにまた古い時期の方形状、四角の竪穴が出たという状況はありました。あと、この住居に関しては、2回あるいは3回位床面を作ったような状況も、堆積した土から確認できたので、基本的にはひとつの竪穴を何回かに分けて使っているというような状況はあるんですけど。

実際にですね、遺物とかから考えた場合に、さきほども話しましたが、仲原式土器という土器がですね、すごく長い時代使われていたものなので、実際に土器だけを見ると違いがそこに明確に出てこないというのはありましてですね、どれぐらいのスパンで建て替えだとかそういったものをしたかというのは、実際にはまだ分かっていない状況にあります。

(山崎) ありがとうございます。なかなか、こういう具体的に竪穴住居の上屋がどういう構造をしていたのかとか、どの位耐用年数があったのかというのは実際に考古学的に考えれば非常に難しいテーマでもあります。

今後の集落遺跡調査研究の展望

そろそろ時間がなくなってきたとめなくてはならないのですが、今回こういう集落遺跡を取り上げたシンポジウムを行いまして、いろんな課題問題点、わからないところ、こんなところが知りたいというところと、たくさん出てきたかと思えます。今後まだまだ発掘調査は続いていきますし、こういう集落遺跡の調査事例も沖縄でもどんどん増えてくると思います。現状でも300に近い竪穴住居が沖縄から発見されているわけですし、そういう住居がどういう風に使われていたのかということは、皆さん非常に興味があるテー

マでもあろうかと思います。今後ですね、沖縄の集落遺跡の調査研究なんかを進めていく上で、お二人にどうの方法で進めていったらいいのかとか、問題点とか、こういうことを言っておきたいということなどありましたら、さらに一言コメントいただきたいと思いますが、與那嶺さんお願いしてもよいでしょうか？

(與那嶺) 今回の調査ではですね、堅穴住居というものを掘ったんですけども、後からああすれば良かったこうすれば良かった、というのは結構あってですね。発掘調査に関しての技術のなさを思い知った調査ではあったんですけど、具体的にはピットをうまく検出してしっかり掘りきれのようにしたいとか、結構調査しているとばやーっとしているような黒ずみ?があつてピットだろうとやってみたりもするんですけども、それをちょっと迷って、非常に解釈が難しかったりするので、ちょっと何を言っているのか分からなくなってきたんですけど…笑

(山崎) こんなことやってみたいとかあったら。調査…？

(與那嶺) もうちょっと勉強してしっかり調査したいなということで逃げたいと思います。

(山崎) ありがとうございます。続いて長濱さん。

(長濱) 僕も、集落遺跡を掘ったというのはこのヌバタキ遺跡が初めてになります。そんな初めての集落遺跡なんですけど、これだけのすごい情報量があつて、宜野湾市内だけじゃなくてですね、沖縄県内においてもすごい重要な遺跡なんだなという風に思うんですけど、それを初めてのわりにやっちゃって、ちょっと失敗というのもあったんですね。実際にいろんな遺構だとか遺物だとかつていうのは出てはいます。資料にもちょっと書かせていただいたんですけど。

実際に皆さんからのご質問等もあったんですけど、この住居と大型の建物の関係性ですね、そういったものは、やはりどうしても、整理してまとめて、どういった関係でこういったものがあるのかというのは確認しないといけないと思います。あと、さきほどから上屋の話もありますように、住居の構造ですね、それもやはり今後いろいろ解決していかないとけないものだと思います。そういったものの課題がヌバタキ遺跡を掘っていて痛感させられたんですけど、実際に宜野湾市の外の事例ですね、今日お話がありました古宇利原 B 遺跡の話だとか伊江島のナガラ原。

あとは、伊計島の仲原遺跡。そういった県内の集落遺跡で確認された状況とか事例ですね、そういったものを実際に確認しながら、それはヌバタキ遺跡ではどういう風に解釈できるだろうということをしていきたいなと思っています。逆に、ヌバタキ遺跡の状況からこういった他の遺跡を見ていったら、他の遺跡も含めて沖縄県内の集落遺跡っていうのはどういった状況なのかなっていうのは、今後また少しずつ分かってくるんじゃないかなと、少し期待はしています。

(山崎) ありがとうございます。司会の無茶振りに真摯に対応いただきまして、とても感謝しております。それでは、おおよそ時間がまいりましたので以上で今回の討論はこれを持ちまして終了ということにさせていただきますと思います。今日はお集まりいただきましてどうもありがとうございました。

(註1) ヌバタキ遺跡では平成 25 年度の第 7 次調査でジュゴンの骨で製作された骨製品（簪^{かんざし}？）が出土している。

